

一八八二年十二月某日

マルワリの信者たちと聖ラーマクリシュナ

午後であった。校長と一、二の信者が坐っている。マルワリ（インド北西部）の信者たちが数人来て、タクールにご挨拶をした。彼等はカルカッタに商用のため来たのである。彼等はタクールに、「何とぞ、我々に教訓のお言葉をいただきとうございます」と申し上げた。タクールはにこにこ笑っておられる。聖ラーマクリシュナ（マルワリの信者に向かつて）ね、私と私のモノ——この二つが無智というものなんだよ。おお神様、あなたが御主人、一切すべてあなたのもの——これが智慧というもの。どうして私のモノなんて言える？庭園の管理人は手前どもの庭なんて言っているが、何か失敗して旦那に追い出されるときは、マンゴーの木で作った自分の物入れ箱さえ持つて出る勇氣もない。愛欲や怒りのようなものは、どうしても無くならない。だから、それを神様の方へクルリと向け変えろ。何かを手に入れたいと言う欲があったら、神様を手に入れたいという欲にしてみまえてしまえ。よく考えて判断して、この世のはかない事物から欲を外らしてしまえ。象がよその庭のバナナの樹を食べようとすれば、象使いは先の尖った棒で突つつくよ。

お前たちは商人だから、商売の進め方を知っているだろう。人によっては、最初にひまし油作りから

始めて、かなりの金を儲けると、こんどは衣類の店を出す。そんな具合にして、人は神への道に進んでいくものだ。そして、時々独りになって神様に呼びかけることが、多くなってくるよ。

だけでも、このことは知っているかな？ 時期が来なければどうにもならない、ということ。ある人々には、経験しなければならぬことがどっさり残っている。そのために遅れているのだ。オデキだって、あまり早いうちに切開すると結果が良くないだろう。膿んで柔らかくなって口ができた頃に、医者とは切開する。子供が、お母ちゃん、ボク、おねんねするから、おしっこするとき起こしてね」と言うと、母親はこう答える。坊や、おしっこがしたくなければ、自分で目が覚めますよ。母さんが起こさなくなつて、大丈夫よ」（一同爆笑）

〔マルワリの信者と商売をしていてウソをつくこと——ラーマの御名を歌う〕

マルワリの信者たちは時々、タクールに捧げるために、果物や皿に盛った砂糖菓子などの品物を持参してやることもある。皿盛りの砂糖菓子は、いつもバラ香水のにおいがした。だがタクールは、こうした品物を殆どお受けにならなかつた。「あの人たちは、さんざんウソをつけて金を儲けているから——」とおっしゃるのである。それで、他の話に事寄せて、次のような教訓をお与えになつた。

聖ラーマクリシユナ「ああ、商売をしていれば、本当のことばかりも言っていられないさ。商売には景気のいいときも悪いときもあるし——。そうだ、ナーナク（シーク教の開祖）の話がある。あの方はこうおっしゃつたそうだ。『不正直な人や、不道徳な人が持つてきたものを食べようとしたら、それ

がみんな、血だらけになって見えた』と。修行者たちには、清浄な品物を持っていかなければいけないよ。不正直な方法で儲けた金で買ったものを持っていつてはいけない。誠実な道を通れば、神様に触れる。(原典註)

いつも、あの御方の名を称えてなさいよ。仕事をしているときでも、心はあの御方のそばに置いとくのだ。わたしは背中にオデキが出来るよ、日頃の用事は何でも足していても、心はいつもオデキに惹きつけられているんだが、丁度そんなふうだね。ラーマの御名を称えるのはいいことだよ。ラーマはダシヤラタ王の息子、そして世界をお創りになる。そして、すべてのものの中にいらっしやる。ほんとに、ほんとに、身近にいらっしやる——わたしらの、中にも、外にも。

おお ラーマはダシヤラタの子

おお ラーマはひとり、ひとりの内に宿り

おお ラーマは世界の主あるじ

おお ラーマはすべての支配者

(原典註)この真我は、アトマ真実、正しい智識、禁欲、不断の修練によって得られる。(ムンダカ・ウパニシャッド 3・1・5)
真実のみ勝つ、虚偽に非ず。(ムンダカ・ウパニシャッド 3・1・6)